日本語母語話者のロシア語 Multiple WH 疑問文の習得
母語と第二言語の第三言語に対する影響について

Acquisition of Russian Multiple WH questions by native Japanese speakers
the influence of first and second languages on a third language

加藤　昌也

目次

序章　はじめに

第 1 章　第三言語習得研究の言語転移の先行研究とロシア語の WH 疑問文の先行研究
1.1　言語転移に関する先行研究
1.1.1　L1 transfer と L2 status factor
1.1.2　Cumulative Enhancement Model
1.1.3　Typological Proximity Model
1.2　ロシア語の WH 疑問文の習得に関する先行研究

第 2 章　各言語における WH 句の移動の性質
2.1　英語の WH 移動
2.2　ロシア語の WH 移動
2.2.1　[+WH] で動くWH移動
2.2.2　[+Focus] で動くWH移動

2.3　日本語の WH 移動

第 3 章　WH 句が複数含まれる疑問文の文法性判断実験
3.1　調査の目的と仮説
3.2　文法性判断実験の実施
3.2.1　被験者
3.2.2　調査方法
3.2.3　実験で用いられた WH 疑問文の種類
3.3　文法性判断実験の結果と考察
3.3.1　被験者の回答データ
3.3.2　全体データの結果
3.3.3　個人データの結果

第 4 章　おわりに

Appendix

参考文献

序章　はじめに

第二言語習得理論（Second Language Acquisition 以下、SLA）は、1960 年代に言語学の中の研究分野として生まれてきた。この SLA は学習者が母語（First Language 以下、L1）を学んでから新たに別の言語を学ぶプロセスであると佐野（2023）は述べている。換言すれば、SLA の研究対象となるのは、第二言語（The second language 以下、L2）を学習している学習者の L2 の習得プロセスということになる。こうした SLA の研究は 1960 年代から現在も約 60 年もの間、研究が進められてきた。

一方で、第三言語習得（Third language acquisition 以下、TLA）の研究が進められるようになったのは近年のことである。金（2022）によると、TLA の研究分野が広がり始めたのは、2000 年代からであり、2000 年以前までは、第三言語（The third language 以下、L3）の言語習得は SLA の研究の中の特別な例として位置づけられていたとしている。その後、TLA の研究が主に取り上げられるようになった。金（2022）は、日本国内における TLA に関連した論文の数は 41 本であり、そのうち 26 本の論文は、日本語母語話者を対象にし、研究対象となる目標言語として、英語以外の外国語の学習の事例を取り上げていると述べている。金（2022）によれば、研究対象となる英語以外の外国語の多くは、ドイツ語やスペイン語等の英語の統語構造に近い言語であった。こうした TLA の研究には 2 つの課題がある。1 つ目の課題は、TLA に関連した論文数が SLA に関連した論文数と比べて少ないことにある。2 つ目の課題は、日本語母語話者を対象にした TLA の研究では英語に近い言語を目標言語に設定している点である。

この 2 つの課題を踏まえ、L3 となる言語の文法が学習者の L2 である英語の特徴と L1 である日本語の特徴を併せ持ちながらも、英語と日本語とは異なる文法構造をしている言語を対象にして L1 と L2 の L3 との関係性を解明することは、TLA の研究の発展に寄与することにつながることが見込まれる。

そこで、本研究は、L1 と L2 の言語知識が L3 の文法性判断にどう影響を及ぼすのかにつ

いてを解明することを目的に、日本語母語話者を対象に、L1 を日本語、L 2 を英語とし、英語と日本語が持つ特徴と異なる特徴を併せ持つ言語として L3 をロシア語とする。その中でも、後述する各言語の WH 疑問文の特性の観点からロシア語の WH 句が複数ある WH 疑問文に関する文法性の判断について日本語、英語、ロシア語の WH 疑問文の構造と第三言語習得研究の転移に基づく仮説を立てて、検証を行う。

本論文の章立てとして、第 1 章では、第三言語習得研究において L1 と L2 と L3 がどのように関係するのかに関する先行研究とロシア語の WH 疑問文の習得に関する先行研究を取り上げる。第 2 章では、日本語、英語、ロシア語の WH 疑問文の構造と、WH 疑問文の Superiority による文法性の違いは生じるのかの比較をするために、それぞれの WH 疑問文の構造と特徴に関する先行研究について述べていく。第 3 章では、実施した文法性判断実験の概要と結果について述べ、結果から示唆される WH 疑問文の文法性判断と転移について考察していく。第 4 章では、本研究の実験結果から見えてきた可能性についてまとめる。

第 1 章　第三言語習得研究の言語転移の先行研究とロシア語の WH 疑問文の先行研究

1.1　言語転移に関する先行研究

言語転移（Language Transfer 以下、転移）とは、新しく学習している言語習得の処理の中で、学習者がすでに習得している言語の特性が適用される現象であると、Rothman, Alonso and Puig-Mayenco（2019）は述べている。Slabakova and García Mayo（2017）によると、TLA における転移に関する理論として、2 つの種類がある。1 つ目の転移の理論は、L1 か L2 のどちらかが L3 への転移の要因となるという理論である。2 つ目の転移の考え方は、L1 も L2 もどちらも L3 の転移の要因となるという理論である。この 2 つの理論に関して、順に論じていく。

1.1.1　L1 transfer と L2 Status Factor

L1 transfer は、学習者の第二言語である L2 よりも、学習者の母語である L1 の言語特性が L3 の言語習得に転移するという L1 transfer model という理論がある。この考え方は、Håkansson, Pienemann and Sayheli（2002）によって提唱された理論であると Dehghani（2024）は述べている。

L2 status factor は、L2 が L1 よりも L3 の言語習得の際に転移するという理論である。この理論は、Bardel and Falk（2007）等が主張している。Bardel and Falk（2007）は、言語背景として、英語、ドイツ語、オランダ語、ハンガリー語が含まれており、スウェーデン語かオランダ語のどちらかを L3 とする学習者を被験者と定めた。Bardel and Falk（2007）は、その学習者は L3 の文法性判断の際に、否定語である not を動詞の前に置くのか、動詞の後に置くのかを明らかにする実験を行った。Bardel and Falk（2007）は、動詞の前に否定語が置かれる言語を L1 とし、否定語が動詞の後に置かれる言語を L2 とするグループと、否定語が動詞の後に置かれる言語を L1 とし、否定語が動詞の前に置かれる言語を L2 とするグ

ループの間でどのような結果になるのか検証した。実験の結果、動詞の前に否定語が置かれる言語を L1、否定語が動詞の後に置かれる言語を L2 とし、否定語が動詞の後にくる言語であるスウェーデン語を L3 とするグループは、L3 の否定語の位置に関して、動詞の後に置くことが見られた。一方で、動詞の後に否定形がくる言語を L1、動詞の前に否定形がくる言語を L2 とし、L3 をスウェーデン語とするグループは、否定語を動詞の前に置くことが見られた。このことから、Bardel and Falk（2007）は、L1 よりも L2 から L3 への転移が生じていると結論付けた。

1.1.2　Cumulative Enhancement Model

Cumulative Enhancement Model（以下、CEM）は、Flynn（2004）によって提案された理論である。CEM は、習得した言語の順番に関わらず、L1 と L2 の言語特性のうちのどちらかが L3 の言語習得に転移の要因となるという考え方である。Flynn（2004）は、L2 としてロシア語を学習し、L3 として英語を学習しているカザフ語母語話者、スペイン語母語話者、日本語母語話者の 3 つのグループに対し、関係節の文の発話実験を行った。実験の結果、L3 の英語の習得に際し L1 と L2 の両言語から L3 への Facilitative Transfer（以下、正の転移）[1]が示された。 CEM は、L1 と L2 の両言語は習得された順番に関わらず、L3 の習得の際に正の転移の役割を持っていると、Dehghani（2024）は述べている。

CEM の理論を主張する他の研究として、Leung （ 2005 ） の研究が挙げられる。Leung（2005）は、フランス語を L2 とする学習者とフランス語を L3 とする学習者の Determiner Phrase（DP）の習得の研究によって CEM の理論をさらに確実化させた。Leung（2005）は、ベトナム語を L1 とするモノリンガルと中国語と英語のバイリンガルによるフランス語の習得の比較を行った。研究の結果、中国語と英語のバイリンガルの被験者は、ベトナム語のグループと比較して、フランス語の冠詞に関して、正答率が高いことが示された。

---

[1] 正の転移とは、学習者にとって習得を促進させるものとなる転移のことを指す。

しかしながら、CEM の研究は正の転移に焦点が当てられており、Non-Facilitative Transfer（以下、負の転移）[2]に関しては焦点が当てられていないと Dehghani（2024）は述べている。また、García Mayo and Rothman（2012）は、何が正の転移になり、何が負の転移になりうるのかについて言及されていないと CEM に対して批判をしている。この問題点にも焦点を当てるために、Typological Proximity Model （TPM）という理論が生まれた。

1.1.3　Typological Proximity Model

Typological Proximity Model（以下、TPM）は Rothman（2010, 2011, 2013）によって提案された理論である。García Mayo and Rothman（2012）によると、TPM は CEM と同じように L1 と L2 の両方が L3 への転移の要因となるという考え方を共有しているが、CEMとは異なり、TPM は、言語間で類型的な近似性が見られる場合にのみ、転移が生じるということを仮説化した。更に、TPM は、文法構造の近似性によって正の転移だけではなく負の転移も生じると García Mayo and Rothman（2012）は述べている。Rothman and Cabrelli Amaro（2010）の研究によると、音形をもたない主語のパラメターに関して、L3 としてイタリア語かフランス語を学習していて L2 をスペイン語とする英語母語話者のグループと、L2 としてイタリア語かフランス語を学習している英語母語話者のグループの間で調査を行ったところ、スペイン語とイタリア語の間の文法の類型的な近似性は正の転移を誘発したが、主語に音形をもたないという特性は L3 のフランス語に対して、負の転移をもたらしたという結果が導き出された。

Rothman（2010）は、L2 status factor と言語間の構造の近似性を考慮した。Rothman（2010）は、L1 を英語とし、L2 をスペイン語とし、L3 をブラジルポルトガル語とするグループと、L1 をスペイン語、L2 を英語とし、L3 をブラジルポルトガル語とするグループの間で、関

[2] 負の転移とは、習得の促進を阻害させる転移のことを指す。

係節の語順に関する分析を行った。英語の構造はブラジルポルトガル語の構造と似ているが、スペイン語の方がブラジルポルトガル語に似ていると Rothman（2010）は述べている。例えば、英語とブラジルポルトガル語は動詞に対し、人称と数の接尾辞をつけて活用する必要がある一方で、スペイン語とブラジリアンポルトガル語では、どちらも人称と数に対して異なるものを学ぶ必要がある。この構造の近似性を踏まえて研究を行った結果、スペイン語の統語知識はブラジルポルトガル語に転移し、英語も同様の正の転移が示された。Rothman（2010）は、TPM は L3 習得のメインとなる転移モデルであると結論付けた。そして、Rothman（2010）は L2 status factor と CEM の理論をそれぞれ否定した。

1.2　ロシア語の WH 疑問文の習得に関する先行研究

ロシア語の習得の先行研究として、Ostapenko（2008）の研究が挙げられる。Ostapenko（2008）の研究内容は、ロシア語を L2 として学習している英語母語話者に対して、ロシア語の WH 句が複数ある WH 疑問文という、語学学習では触れることない文法事項を正しく習得しているのかについてであった。

Ostapenko（2008）の研究では、実験文として主語と直接目的語の WH 疑問文、主語と付加詞（以下、Adjunct）を含む WH 疑問文、直接目的語と Adjunct を含む WH 疑問文を含む 8 種類の WH 疑問文が定められた。実際の実験では、主語の what と目的語の WH 句、主語が名詞か代名詞で、直接目的語と間接目的語が WH 句になっているタイプ等が実験文として定められているが、本論では、Superiority に関する研究を取り扱うため、主語と直接目的語、主語と付加詞、直接目的語と Adjunct の 3 種類を取り上げることとする。

Ostapenko（2008）が実験の際に提示した 40 問の実験文のうち、19 問は複数の WH 句が主節の文頭に移動した構造の WH 疑問文、それ以外の 21 問は一方の WH 句が文頭へ移動し、もう一方の WH 句は in-situ となる WH 疑問文であった。Ostapenko（2008）は、15

人の被験者に文の産出タスクや文法性判断実験、反応タスクの 3 つの実験を行った[3]。文法性判断実験では、実験文に対して正しいか否かの判断を、完全に文法的である場合は、＋2、文法的であるかもしれない場合は、＋1、非文法的かもしれない場合は－1、完全に非文法的な場合は－2という 4 段階に分け、実験文となる WH 疑問文が、＋1から－2までのどの段階に当てはまるのかという判断を行った。実験の結果、15 人の被験者のうち、4 人がほとんどの実験文に対して文法的だと判断した。すべての実験文に対し、文法的だと判断した割合が 80%に届かなかった被験者は 6 人であった。WH 疑問文のタイプによって文法的だと判断した割合が変化した被験者は 5 人であった。

文法性判断実験から、L1 が英語でロシア語を L2 とする学習者は、全体的に Superiority を遵守している WH 疑問文よりも、Superiority を遵守していない WH 疑問文に対して、文法性が下がるという判断をすることが示された。これは、主語が who の WH 句であっても、無機物を指す what の WH 句のどちらも、もう一方が直接目的語の WH 句に関しても、Adjunct の WH 句に関わらず、Superiority を遵守していない方の疑問文の文法性は下がると判断していたと Ostapenko（2008）は結論づけた。この結果が示された理由として、Ostapenko（2008）は、被験者はロシア語の WH 句が複数ある WH 疑問文をインプットする機会が少ないという Frequency Factor 説（Brey-Vroman 2002） を否定し、英語の Superiority によって文法性に差が生じるという統語知識が、ロシア語の文法性判断に転移したからではないかと指摘した。しかしながら、Ostapenko（2008）は、ロシア語のSuperiority を遵守している WH 句が複数含まれる WH 疑問文と、Superiority を遵守していない WH 句が複数含まれる WH 疑問文のどちらも文法的だと判断した被験者も散見されたと述べている。このことから、Ostapenko（2008）は、L1 を英語、L2 をロシア語とする被験者のロシア語の WH 句が複数含まれる WH 疑問文の習得において、英語の WH 句が複数含まれる WH 疑問文の統語知識が、ロシア語の WH 句が複数含まれる WH 疑問文の文法性判断に転

[3] 本論では文法性判断実験の分析と結果について取り扱う。

移した可能性のあるロシア語学習者と、英語からの転移が生じず、ロシア語の WH 句が複数含まれる WH 疑問文の文法性を正確に判断できていたロシア語学習者も見られたと結論づけた。

第 2 章　各言語における WH 句の移動の性質

2.1　英語のWH 移動

WH 移動という現象は、英語においては、WH 句がD 構造において生成された位置から、CP の指定部に移動する現象である。英語の WH 移動は、CP の主要部の C にある［+WH］という素性と WH 句が持つ［+WH］の素性を一致させるために WH 句が CP の指定部に移動される。

(1)　　What$_i$ do you buy t$_i$?

英語の WH 移動では、WH 句の間に優位性（以下、Superiority）が見られる（Takahashi 1993）。Chomsky（1973）によると、Superiority condition とは、変形操作をする際に、原則としてその構造内にある 2 つの構成素が変形に適用されることが可能な場合、より優位にある構成素の変形の方が要求されるという条件である。英語は、Superiority を遵守しているか否かによって文法性に差が出る言語であることが示される。(2) の例文は、WH 句が複数含まれる英語の疑問文である。

(2)　a.　　Who bought what ?

　　b.　　*What$_i$ did who buy t$_i$?

(2) の WH 疑問文において、上位のWH 句は who である。そして、そのWH 句よりも下位にある WH 句は what である。この場合、（2a）は経済性から上位の WH 句の who が、CP の指定部へと移動しており、下位の WH 句である what は in-situ となっていることから、Superiority を遵守しているため文法的である。しかし、(2b) は CP の指定部に移動させなければならない上位の WH 句の who を飛び越えて、下位の WH 句の what が主節の

CP の指定部に WH 移動を起こしているため、Superiority が遵守されていないことから非文法的となることが示される。このように英語では、WH 句が複数ある WH 疑問文において上位のWH 句がCP の指定部へと移動し、下位のWH句はin-situ となることが示される。この Superiority を遵守しないことにより非文法的となる現象は、WH 句が Adjunct の場合においても見られる。（3）の WH 疑問文は、主語の WH 句の who と Adjunct の WH 句の when を含むWH 疑問文である。

(3)　a.　Who died where ?

　　b.　*Where$_i$ did who die t$_i$?

（3a）の WH 疑問文では、上位の WH 句である who が文頭へ移動しており Superiority を遵守しているため文法的な文となるが、（3b）の WH 疑問文は、下位にある WH 句の where が上位の WH 句の who を飛び越えて移動しているため Superiority を遵守しておらず、非文法的な文となる。（4）の直接目的語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む WH 疑問文は、直接目的語のWH句が文頭へ移動し、Adjunct のWH句が in-situ となるWH疑問文の場合は非文法的となるが、Adjunct のWH句が文頭へ移動し、直接目的語の WH 句が in-situ のWH疑問文の場合は文法的となる。（4）の例では、構造上、Adjunct を object に対してどこに付加するかによって文法性に差が生じている（cf., Takahashi 1993）[4] 。

[4] 直接目的語と Adjunct のWH句が含まれるWH疑問文に関しては、英語母語話者によっては文法性判断に差が出ると、石岡（2001）は述べている。Takahashi（1993）は、Object-Adjunct が非文法的となると述べている。本研究は、Takahashi（1993）による論を採用する。

(4)　a.　*What$_i$ did he eat t$_i$ when ?

　　b.　When$_i$ did he eat what t$_i$?

この WH 疑問文の文法性の違いは、（2）、（3）、(4) で提示した主節の WH 疑問文（以下、短距離のWH 疑問文）だけでなく、(5)、(6)、(7) のような主節内に従属節が含まれる WH 疑問文（以下、長距離のWH 疑問文）においても同様のパターンが示される。

(5)　a.　Who$_i$ do you know t$_i$ ate what ?

　　b.　*What$_i$ do you know who ate t$_i$?

(6)　a.　Who$_i$ do you know t$_i$ died when ?

　　b.　*When$_i$ do you know who died t$_i$?

(7)　a.　*What$_i$ do you know he ate t$_i$ when ?

　　b.　When$_i$ do you know he ate t$_i$ what ?

以上の点から、英語の WH 移動は[+WH]という素性によって生じており、WH 句が複数含まれるWH 疑問文の場合、短距離の WH 疑問文においても、長距離の WH 疑問文においても、WH 句の語順によって、文法性は異なるというのが英語の特徴である。

2.2　ロシア語のWH 移動

ロシア語は、英語のように、主語、動詞、目的語の語順となる言語である。更に、ロシア語の WH 疑問文は、英語の（1）の文と同様に WH 句は文頭に顕在的に移動する統語構造となっている。

(8)　　Gde$_i$ ty　rabotaes t$_i$?

where you work

'Where do you work ?'　　(Bailyn 2012 p. 93)

しかしながら、WH 句が複数含まれる WH 疑問文の場合、ロシア語は英語とは異なり複数のWH句を文頭に移動させなければならないという特徴がある。

(9)　a.　　Kto　kogo$_i$　videl t$_i$?

who whom　saw

'Who saw whom ?'

b.　　*Kto videl kogo ?　　(Stepanov 1998 p. 108)

(9a)は、主語の WH 句の who にあたる kto と直接目的語の WH 句の whom にあたる kogo がともに文頭に移動している。(9a)は、両方の WH 句がともに文頭に移動しているため文法的な文となる。一方で、(9b)では、主語の WH 句の kto のみが文頭へ移動し、直接目的語の WH 句の kogo が in-situ となっているため、2 つの WH 句が文頭へ移動していないことから非文法的になる。

しかしながら、ロシア語の WH 疑問文に関して、Superiority を遵守しているか否かによって文法性に差が生じる場合があるのかどうかについては、議論の対象となっている。ロシア語の複数のWH句を含む WH 疑問文が、Superiority によって文法性に差が生じる場合があるのかどうかを明確にするためには、ロシア語のWH句の移動はどのような素性によって生じているのかを明らかにする必要がある。ロシア語のWH句の移動の際にWH句に備わっている素性について明らかにすることで、L1 と L2 と L3 の間で、Superiority の有無に

よって文法性の差が現れるのかどうかの違いの比較を行うことが可能となる。

ロシア語のWH移動は、英語の WH 移動と同様に［+WH］素性によって引き起こされるという理論（Bailyn 2012）と、ロシア語のWH移動は、［+Focus］という素性によって引き起こされるという理論（Stepanov 1998）がある。以下、順に論じていく。

2.2.1 ［+WH］で動く WH 移動

ロシア語のWH句は、英語と同じ素性である［+WH］によって移動しているという考え方がある。

Bailyn（2012）は、ロシア語の WH 句は、英語と同様に［+WH］によって移動されることを主張している。Bailyn（2012）は、後述するロシア語の WH 句の移動は、［+Focus］の素性によるものであるとする Stepanov（1998）の主張からは、説明ができない事象が存在しているとした。1 つ目の事象として、Bailyn（2012）は、英語のような WH 移動ではないとする主張に対し、Bailyn（2012）は、仮に英語のような WH 移動でないならば、（10）の文と（11）の文の間で、文法性に差が生じる理由について説明がつかないと述べている。（10a）から（10c）までの文は、主語の代名詞が文頭へ主題化された WH 疑問文であり、代名詞の主語が WH 句よりも先行した文である。（10a）から（10c）までの文は、文法的な文となるとBailyn（2012）は述べている。一方で、Bailyn（2012）は、（11）のように、(10)の文を従属節とした場合、文法性が下がることを指摘した。

(10)　a.　Ty　gde$_i$　rabotaeš' t_i ?

you where work

'Where$_i$ do you work t_i?'

b.　Ty　kogo$_i$　včera　videl t_i ?

you NOM who ACC　yesterday saw

'Who$_i$ did you see t_i yesterday ?'

c.　On　u kogo$_i$　ostanovilsja t_i ?

he　at who　stopped

'Who$_i$ is he staying with t_i ?'

(11)　a.　??Nikto　ne　znaet, ty　gde$_i$　rabotaeš' t_i?

nobody NEG knows you where work

'Nobody knows where you work.'

b.　??Maša　menja sprosila, ty　kogo$_i$ včera　videl t_i ?

Masha　me　asked　you who yesterday saw

'Masha asked me who I saw yesterday.'

c.　??Vsem　interesno, on　u kogo$_i$　ostanovilsja t_i?

all-DAT interesting he　at who　stopped

'Everyone is wondering who he is staying with.'

仮に WH 移動が生じていないとするならば、(11) の文の文法性は下がらないはずであると Bailyn (2012) は指摘している。しかしながら、実際は、文法性が下がっていることを Bailyn (2012) は指摘した。

2 つ目の理由として、Bailyn（2012）は、WH 句が元々の性質として Focus されているとなぜいえるのかが不透明であることであると指摘している。（12）は、WH 句を Focus した英語のWH 疑問文である。（12b）は、この曲を書いた人について質問した文であり、この場合において、who が新規の情報であることは明らかである。そのため、新規の情報である who をフォーカスする必要性が見られず、who をフォーカスさせた質問は不自然になることを Bailyn（2012）は指摘した。Bailyn（2012）は、（13）のように、ロシア語でも WH 句にフォーカスイントネーションを置いた場合でも、英語の文と同様に不自然になると述べている。

(12)　a.　??WHO wrote this song ?

　　b.　Who wrote this song ?　（Bailyn 2012 p. 98）

(13)　a.　??KTO napisal êtu pesnju ?

　　who wrote　this song

　　‘Who wrote this song ?’

　　b.　Kto napisal êtu pesnju ?

　　who wrote this song

　　‘Who wrote this song ?’　（Bailyn 2012 p. 98）

3 つ目の理由として、WH句が元々の性質として Focus されていると仮定すると、（14）の例と矛盾していることになる。

(14)　　Gde$_i$　rabotaet IVAN t_i ?

where works　IVAN

'Where$_i$ does IVAN work t_i ?'　　(Bailyn, 2012 P. 94)

(14)は、IVAN にフォーカスイントネーションが置かれた文である。つまり、IVAN が会話内で強調されるべき情報であることを示している。Bailyn（2012）によると、Focus は必ず文の中に 1 つしか含められないため、イントネーションとして Focus されている IVAN と生得的に Focus されているWH句の両方が文中にある文は、どのように解釈されるのかが明らかにされていないとしている。このことから、Bailyn（2012）は、WH句が元々の性質として Focus という状態が付与されているという主張は支持されないとしている。

ロシア語の WH 移動が、［+Focus］による移動ではないと考えられる 4 つ目の理由として、Bailyn（2012）は、（15）の例から、ロシア語の長距離の WH 疑問文には、WHの島の制約があることを指摘した。

(15)　a.　Komu$_i$　ty　xočeš', čtoby posle obeda Ivan pozvonil ?

who-DAT you want　that　after lunch　Ivan phone

'Who do you want that after lunch Ivan phone?'

b.　*Komu$_i$　ty　sprosil, kogda$_k$ Ivan pozvonil t_i t_k ?

who-DAT you　asked　when　Ivan phone

'*Who did you asked when Ivan phone ?'　　(Bailyn, 2012 p. 94)

（15） は、ロシア語の長距離の WH 疑問文である。(15a)では、ロシア語の WH 句である komu が従属節から主節の文頭へ移動しており、文法的となるが、（15b）では、従属節から主節の文頭へ、WH 句の komu が移動し、もう一方の WH 句の kogda は、従属節内の節

頭へ移動している。このことから、ロシア語の従属節のCP の指定部にWH 句がある場合、非文法的となる[5]。

この 4 つの理由から、Bailyn（2012）は、ロシア語の WH 句の移動における素性は、［+Focus］ではなく、［+WH］にあると結論付けた。そして、Bailyn（2012）は、［+WH］によるロシア語のWH 移動により、WH 句は CP の指定部へ移動すると結論付けた。

複数のWH 句が含まれるWH 疑問文の場合のWH 移動の構造として、Bailyn (2012)は、上位にある WH 句は、CP の指定部へと移動し、下位にある WH 句は、Citko（1998）のOperator Position（OpP）という範疇が CP には存在してるというモデルを採用し、Operatorという範疇に移動すると述べている[6]。

さらに、Bailyn (2012)は、ロシア語の WH 句が複数含まれるWH 疑問文では、Superiorityによる文法性の差が生まれる場合があることを指摘した。Scott（2002）によると、従属内で WH 句が複数ある場合、Superiority が生じるとしている。

---

[5] Chomsky（1993）によれば、WHの移動は連続循環の原理によって、従属節にあるWH句は従属節の CPの指定部を経由し、主節の CP の指定部に移動しており、島の制約は、従属節の CP の指定部にすでに WH句がある場合に、そのWH句がもう一方のWH句の主節の CP の指定部への移動を妨げてしまうため、非文法的になってしまう現象であると述べている。つまり、Bailyn（2012）は（15b）におけるロシア語の節の境界にWH句がある場合に、非文法的であるということは、kogda は従属節の CP にあると予測している。この予測は、Bošković（1997）によるWH句が Agreement という範疇の AgrP の指定部にあるという仮説と矛盾することになる。以上のことから、Bailyn（2012）は、ロシア語のWH移動は［+Focus］ではなく、[+WH]によって移動していると仮説を立てている。

[6] Bailyn（2012）は、OpP という範疇が持つ性質については、研究によって解釈が異なることに留意している。Bailyn（2012）は、Rizzi（1997）による CP には、下位範疇が存在するという主張に基づき、Citko（1998）による OpP の範疇が CP にはあるという理論を採用した。

（16）　a.　Maria sprosila, kto$_t$　čto$_k$　t$_t$ posovetoval t$_k$ Darii ?

Maria asked　who-NOM　what-ACC advised　Daria-DAT

'Maria asked who advised what to Daria.'

b.　?*Maria sprosila, čto$_k$　kto$_t$　t$_t$ posovetoval t$_k$ Darii ?

Maria asked　what-ACC who-NOM　advised　Daria-DAT

'Maria asked who advised what to Daria.'　(Bailyn 2012 p. 105)

以上の点から、Bailyn（2012）は、ロシア語の WH 句の移動は、［+WH］という素性が関わっており、ロシア語の WH 疑問文には、Superiority が生じる例があることを提唱した。2.2.2 では、Stepanov（1998）によって提唱された［+Focus］という素性による WH 句の移動がロシア語では起きているという理論について述べていく。

2.2.2　［+Focus］で動く WH 移動

ロシア語のWH 移動は、Bailyn（2012）による［+WH］による移動ではなく、［+Focus］という素性によって生じるという理論がある。

この理論は、Bošković（1997）及び、Stepanov（1998）によって提案された。Bošković（1997）は、セルボクロアチア語のWH句を複数含むWH疑問文の統語構造から、セルボクロアチア語のWH句は、［+WH］とは異なる素性である［+Focus］という素性が備わっていると主張した。

（17）　a.　Ko　je koga　vidio ?

who is whom seen

'Who saw whom ?'

b.　Koga je ko vidio ?　(Stepanov, 1998 P. 454)

（18）　a.　　Ko　si　koga　tvrdio　da　je istukao ?
who are　whom claimed that is beaten
‘Who did you claim beat whom ?’
b.　　*Koga si ko tvrdio da je istukao ?　　（Stepanov 1998 p. 454）

（17a）の文は短距離のWH疑問文であり、複数の WH 句が文頭へ移動した文である。主語のWH句である ko と直接目的語のWH句であるkoga の語順を入れ替えた（17b）の文は文法的であることから、Superiority による文法性の違反は見られない。一方で、（18a）の文は、従属節からWH句が文頭へと移動した複数のWH句を含む長距離のWH疑問文であり、WH 句の語順を入れ替えた（18b）の文は非文となることから、Superiority による文法性の違反が見られる。つまり、セルボクロアチア語は、短距離のWH 疑問文では２つのWH 句の文頭への顕在的な移動が生じて、Superiority による文法性の違反は見られないが、長距離の WH 疑問文では、2 つのWH 句の文頭への顕在的な移動が生じて、Superiority による文法性の違反も見られる。

Bošković（1997）は、セルボクロアチア語の短距離のWH疑問文が、Superiority によって文法性の違いが見られないのは、CP のＣにあるQ素性によるWH移動が生じていないからであると主張した。しかしながら、セルボクロアチア語の WH 疑問文は、英語のような WH移動が生じていないにもかかわらず、複数のWH句が文頭へ顕在的に移動しなければならない。更に、Stepanov（1998）によると、セルボクロアチア語は、英語では、in-situ となる echo 疑問文[7]であっても、WH 句の移動が見られることを指摘している。

---

[7] echo 疑問文とは、相手の質問に対して問い返す際に使用される疑問文のことを指す。この問い返し疑問文では、英語の場合、you ate what?のように、WH句は元の位置に生成される。

(19)　a.　　*Ko　kupuje šta ?
　　who　buys　what
　　'Who buys what ?'
　　b.　　Ko šta kupuje ?　　(Stepanov 1998 p. 462)

セルボクロアチア語のecho疑問文でもWH句の移動が見られることから、Bošković(1997)は、セルボクロアチア語のWH疑問文のWH句の移動は、英語の［+WH］素性によるWH移動ではなく、異なる素性による WH 移動が行われているのではないかと指摘した。Stjepanović（1995）によって説明されたセルボクロアチア語においてWH句ではない語がFocus され、Focus 移動を起こして Focus された語がS構造として文中に現れるところと、セルボクロアチア語のWH句が移動してS構造として文中に現れるところが同じであるという主張を採用し、セルボクロアチア語における WH 句は、［+Focus］という素性が元々の性質として備わっており、セルボクロアチア語の WH 移動は、Focus 移動であるという仮説をBošković（1997）は提唱した。

Stepanov（1998）は、Agreement（以下、Agr）という範疇が CP と TP の間にあるとBošković（1997）は主張していると説明している。AgrPの範疇にある［+Focus］の素性と、WH 句が持つ［+Focus］の素性を一致させるために、WH 句の移動が行われることをBošković（1997）は主張している。Bošković（1997）が提唱した［+Focus］という素性は、すべての WH 句に備わっており、AgrP の主要部である Agr にも［+Focus］の素性が備わっているが、すべてのWH句に備わっている［+Focus］の方が、Agr にある［+Focus］よりも強い素性であると Stepanov（1998）は述べている。そのため、すべてのWH句にある［+Focus］の素性と Agr の［+Focus］の素性を一致させる必要があるため、セルボクロア

チア語では、WH句は一つだけ移動すればよいのではなく、すべてのWH句が文頭へ移動させなければならないと Stepanov（1998）は述べている。

（20）　a.　　Ko　$šta_i$　　$gdje_k$　kupuje t_i t_k ?

who what where buys

'Who buys what where ?'

b.　　*Ko kupuje šta gdje ?

c.　　*Ko šta kupuje gdje ?　　（Stepanov 1998 p. 455）

（20）の文は、セルボクロアチア語の 3 つの WH 句が文頭へ移動した WH 疑問文である。（20a）の文は、文頭に WH 句が移動しており、残りの 2 つの WH 句は kupuje という動詞の後に置かれている。この文は、非文となる。そして、（20b）は、2 つの WH 句が文頭へ移動し、1 つの WH 句が動詞の後ろに置かれており、非文法的な文となる。（20）の例文から Agr にある［+Focus］の素性の方が強いと仮定すると、WH 句がもつ［+Focus］による素性との一致は、1 つの WH 句のみで完結させてしまうことになる。しかしながら、実際には、すべてのWH 句が文頭に移動しなければならない。このことから、すべてのWH 句に備わっている［+Focus］という素性が、Agr がもつ［+Focus］という素性よりも強いため、すべてのWH 句が Agr に移動すると Bošković（1997）は提案した。このすべての WH 句が文頭へ移動しなければならないということは、移動されるべき WH 句が上位にあっても下位にあっても、経済性には変化がないと Stepanov（1998）は述べている。そのため、セルボクロアチア語の短距離の WH 疑問文は、Superiority に関わらず文法性に差が出ないことにつながると Stepanov（1998）は指摘した。一方で、セルボクロアチア語の長距離の WH 疑問文の場合は、Superiority による文法性の差が見られる。セルボクロアチア語の長距離の WH 疑問文が Superiority による文法性の差が生じる理由として、長距離の WH 疑

問文では、循環の原理により C が顕在的に投射されるため、WH 句を Attract する C にある Q 素性によって、上位にある WH 句が最初に移動しなければならなくなるからであると Stepanov（1998）は指摘している。以上の点から、Bošković（1997）は、セルボクロアチア語の WH 移動は、［+Focus］による移動であることを指摘した。

ロシア語のWH句を複数含むWH疑問文におけるWH句の移動も、セルボクロアチア語と同様に［+Focus］による移動であると Stepanov（1998）は述べている。ロシア語のWH句にも、［+Focus］の素性が備わっているとする論拠は、echo 疑問文の構造にある。英語の echo 疑問文とは異なり、（21）のようにロシア語の echo 疑問文では、顕在的なWH句の移動が必要となる。

（21）　a.　Ivan　čto　kupil?
so Ivan what bought
‘So Ivan bought what?’
b.　?*Ivan kupil čto?　（Stepanov 1998 p. 461）

更に、WH 句ではない Focus された構成素も文頭に移動されるという現象がロシア語には見られる。（22）の文において、大文字で示されたものが Focus された語である。

（22）　a.　Ivan KNIGU kupil.
Ivan book　bought
‘Ivan bought a book.’
b.　KNIGU Ivan kupil.
c.　??Ivan kupil KNIGU.　（Stepanov 1998 p.461）

（22a）と（22b）の例から、Stepanov（1998）は、（21）のようなWH句の移動と（22）のようなFocusされた構成素の移動がパラレルになっていると説明し、Stepanov（1998）は、セルボクロアチア語と同様に、ロシア語のWH句も[+Focus]という素性が付与されていると主張した。

（23）　Kogo　včera　vstretil　Ivan ?[8]
whom yesterday　met　Ivan
'Whom did Ivan meet yesterday ?'　（Stepanov 1998 p. 462）

(23)　の文は、včera という文の副詞がWH 句の後に来ている文であるが、Stepanov（1998）は、včera を WH 句よりも前に置くことが可能であると述べている。Watanabe（1993）とBošković（1995）は、Split Infl System により、文の副詞は付加された TP にあると主張している。Stepanov（1998）は、この主張から、(23)の文のWH 句である Kogo は、TP よりも高い位置に置かれていると述べた。Stepanov（1998）は、後述する（28）のような従属節のある WH 疑問文であっても、Superiority による文法性の違いが生じないため、C が顕在的にあるにもかかわらず、Q 素性によって WH 句が attract されないと述べている。それにより、Stepanov（1998）はロシア語における Q 素性は弱いと主張した。そのため、ロシア語のWH句は、CP に顕在的に上がらずに CP と TP の間に置かれるとStepanov（1998）は述べており、Bošković（1997）によって提唱された CP と TP の間にある AgrP にWH 句が置かれると Stepanov（1998）は述べている。（24）は、WH 句が AgrP に置かれた際の構造である。

[8] Stepanov（1998）は、（23）の文は、主語と動詞の語順が交替しているが、そこについては、WH 句の Superiority とは異なる要素であるため、その交替に関する議論は取り扱わないと説明している。

（24）　　$[_{CP}$ Q $[_{AgrsP}$ Kto $[\ _{AgrsP}$ Kak $[_{AgrsP}$ …Spit]]]　　（Stepanov 1998 p. 462）

WH 句の［＋Focus］の素性の方が、Agr にある［+Focus］よりも強いため、どちらのWH 句も移動が必須となる。上位のWH 句であっても下位のWH 句であっても、経済性の原理からは変わらない。そのため、Superiority による文法性の違いは生じないとStepanov (1998) は述べている。

（25）　a.　　Kto kogo$_i$ videl t$_i$?
　　who whom saw
　　‘Who saw whom ?’
　　b.　　Kogo$_i$ kto videl t$_i$?　　（Bailyn 2012 p. 102）

更に、（25b）の文のように、(25a）の 2 つのWH 句が文頭へ移動したWH 疑問文の文頭に移動した 2 つの WH 句の語順を入れ替えることが可能であるため、Superiority を遵守しているWH 疑問文と遵守していないWH 疑問文のどちらも文法的な文となるという特徴がロシア語のWH 疑問文には見られる。

（25）のようなロシア語の複数の WH 句が文頭へ移動する現象は、主語や直接目的語等の Argument ではない when 等の Adjunct のWH句が含まれる場合であっても同様に見られる。更に、WH 句の Superiority による文法性の差は、(26）や（27）のように、WH 句が Argument や Adjunct であっても見られない。

(26)　a.　Kto kogda$_i$ umiral t_i ?
who when died ?
'Who died when?'

b.　Kogda$_i$ Kto umiral t_i ?

(27)　a.　Kto kak$_i$ spit t_i ?
who how sleeps
'Who sleeps how?'

b.　Kak$_i$ kto spit t_i ?　(Stepanov 1998 p. 457)

ロシア語の短距離の WH 疑問文において、WH 句の Superiority による文法性の差が生じないという現象は、(28) のような長距離のWH疑問文の場合においても、Superiority は見られない。しかしながら、長距離のWH 疑問文の場合、従属節から主節へのWH 句の移動が文法的となるのは、Subjunctive を取る動詞が主節の動詞となる長距離のWH 疑問文であると Stepanov (1998) は述べている。

(28)　a.　Kto$_i$　kogo$_k$ ty xočeš' čtoby t_i priglasil t_k ?
who whom you want that invited
'Who do you want to invite whom ?'

b.　Kogo$_k$ kto$_i$ ty xočeš' čtoby t_i priglasil t_k ?　(Stepanov, p.c.)

同じく、Adjunct のWH 句と Argument のWH 句を含む疑問文においても、Superiority は見られない。

（29）　a.　Kogo$_i$ kogda$_k$ ty xočeš' čtoby ja priglasil t_i t_k?

whom when you want that-sbj I invited

'Who do you want me to invite when?'

b.　Kogda$_k$ kogo$_i$ ty xočeš' čtoby ja priglasi t_i t_k ?　　(Stepanov, p.c.)

これらの例から、Stepanov（1998）は、ロシア語では短距離の WH 疑問文も長距離のWH 疑問文も Superiority による文法性の差は見られないと主張している。

このように、ロシア語は Superiority による文法性の違いがないにもかかわらず、WH 句の文頭への移動が見られることから、［+WH］の素性ではなく［+Focus］という素性によってWH 句が移動していると、Stepanov（1998）は結論づけた。そして、ロシア語のWH 移動は、［+Focus］の素性によって WH 移動が起き、Superiority が主節のWH 疑問文であっても従属節のあるWH 疑問文であっても生じないと Stepanov（1998）は主張した。

以上のことから、ロシア語の WH 移動は、［+WH］の素性によって生じたものであるという理論と［+Focus］による素性によって生じたものであるという理論の 2 つの理論があることが確認された。本研究では、WH 句の移動は、［+Focus］による移動であるという論を採用する。

2.3　日本語のWH 移動

2.3.1　日本語のWH 句の移動と Scrambling

日本語におけるWH 疑問文は、英語やロシア語とは異なりWH 句の主節の CP への移動は義務的ではなくin-situ となる。そのため、日本語の WH 移動は顕在的な移動ではなく潜在的な移動となる。また、日本語の場合はかき混ぜ（Scrambling）と呼ばれる現象がある。この現象によって（30）のように、英語とは異なり日本語は語順を入れ替えることが可能である。

(30)　a.　Dare-ga　nani-o　tabeta no ?
who NOM what ACC ate　Q
'Who ate what?'
b.　Nani$_i$-o dare-ga t$_i$ tabeta no ?　(Takahashi 1993 p. 663)

(30a) と (30b) の文はどちらも WH 句が複数ある短距離のWH 疑問文であり、(3b)の文は、(30a)の文の主語である WH 句の dare-ga と直接目的語である WH 句の nani-o の語順を入れ替えた文である。これらの文はどちらも文法的である。この短距離の WH 疑問文における WH 句の語順の入れ替えが可能である点が、ロシア語と同じ特徴を持つ。しかしながら、下位の WH 句が節の境界を越えた長距離移動を行うWH 疑問文の例では Superiority による文法性の変化が生じると Takahashi(1993)は述べている。

(31)　a.　John-ga　dare-ni　[Mary-ga　nani-o　tabeta-to]　itta no ?
John NOM who DAT Mary NOM　what ACC　ate　COMP　said Q
'Who did John tell that Mary ate what ?'
b.　??Nani$_i$-o John ga dare-ni Mary-ga t$_i$ tabeta to itta no ?
'What did John tell who Mary ate ?'　(Takahashi 1993 p. 664)

(31a) の文は、WH 句が複数ある文法的なWH 疑問文であり、主節の間接目的語の dare-ni というWH 句と従属節の直接目的語の nani-o が in-situ のWH 句となる WH 疑問文である。しかし、(31b) のように、dare-ni よりも下位に位置している WH 句の nani-o が従属節から主節の文頭の位置に移動した文は、文法性が下がっている。Takahashi(1993) は、(32) の文のように WH 句を NP に置き換えた文だと文法性の変化は起きないため、(31b) の文が (31a) の文に比べて文法性が下がるのは、上位の WH 句より低い位置にある WH 句が

従属節から主節の文頭へ移動することによって生じたからであると提案した。

（32）　Pizza-o　John-ga　dare-ni　[Mary-ga　tabeta to]　itta no? pizza
ACC JohnNOM who DAT Mary NOM ate COMP said Q ‘Pizza, did
John tell who that Mary ate ?’（Takahashi 1993 p. 664）

更に、（31b）の文の文法性が下がる要因は、単に WH 句が従属節から主節へ移動したからではなく、長距離の WH 疑問文において一方の WH 句を飛び越えてもう一方の WH 句が文頭に移動したからであることをTakahashi（1993）は示した。Takahashi（1993）は、この長距離の WH 疑問文において WH 句の語順を入れ替えた時、文法性に差が生じるのは WH 句の Superiority によるものであると主張した。

次の（33）の文は、2 つの WH 句がそれぞれ従属節内で in situ となっている WH 句が複数ある WH 疑問文である。（33a）の WH 疑問文は、（31）の文とは異なり、従属節内にもう一つの従属節が含まれている長距離のWH 疑問文である。

(33) a. John-ga [Bill-ga dare-ni [Mary-ga nani-o tabeta to]
John NOM Bill NOM who DAT Mary NOM what ACC ate COMP
said to] omotteiru no ?
itta COMP think Q
'Does John think that Bill told whom that Mary ate what?'

b. Dare-ni$_i$ John-ga [Bill ga t_i [Mary-ga nani-o tabeta to] itta to] omotteiru no ?
'Whom, does John think that Bill told that Mary ate what ?'

c. ??Nani-o$_i$ John-ga [Bill-ga dare-ni [Mary-ga t_i tabeta to] itta to] omotteiru no ?
'What, does John think that Bill told whom that Mary ate ?'
(Takahashi 1993 p. 664)

(33a) は、WH 句の nani-o が下位にあり、WH 句の dare-ni が上位に位置しており、Superiority を遵守しているため、この文は文法的に正しい。更に、(33b) も、上位の位置にあるWH 句の Dare-ni が文頭へ移動した形であり、下位に位置するWH 句が上位の位置にある WH 句を飛び越えてはいないため、文法的となる。一方で、(33c) の文は、高い位置にあるWH 句であるdare-ni より低い位置にあるWH 句の nani-o が従属節から主節の文頭に移動した形である。Takahashi (1993) は、(33c) の文法性は、(33a) と比べて文法性が下がると述べている。これらの理由から、Takahashi (1993) は、日本語の複数の WH 句を含む長距離のWH 疑問文では、下位の WH 句が上位のWH 句を飛び越えた場合、文法性が下がると結論付けた。つまり、短距離の WH 疑問文では、Superiority に関わらず文法性が下がらないのに対し、長距離の WH 疑問文は Superiority によって文法性が下がるということになる。Takahashi (1993) はこの長距離の WH 句の scrambling は、WH移動であり、

移動されたWH句はIP の付加ではなくCP の指定部にあるとして以下の論を展開している。次の文において WH 句が文頭に移動した場合における WH 句の移動場所が IP なのか CP なのかについて以下のように論じている。

（34）　a.　John-wa [Mary-ga dare-ni nani-o ageta ka] siritagatteiru no ?
John NOM Mary NOM who DAT what ACC give Q know Q
To Whom does John want to konw whether Mary gave what ?

b.　Dare-ni$_i$ nani-o$_k$ John-wa[Mary-ga t_i t_k ageta ka] siritagatteiru no ?

（Takahashi 1993 P. 669）

（34a）では、2 つの WH 句が従属節の scope にも主節の scope にもなりえるため、John が Mary が誰に何を上げたかどうか知りたがっているのかという事実について尋ねる Yes/No 疑問文の解釈と、Mary が実際に誰に何を上げたのかについて尋ねるWH 疑問文の解釈の 2 つの解釈が可能となる。一方、（34b）では、主節の文頭にある WH 句の dare-ni と nani-o の 2 つの WH 句は従属節の scope ではなく主節の scope のみを取る。Takahashi（1993）は （34b）の文の意味は、Mart が実際に誰に何を挙げたかどうかの意味を取ると述べている。このことから、従属節から文頭に節を越えて移動した WH 句を LF で従属節に移動させることができないと Takahashi（1993）は述べている。一度 WH 句が顕在的で統語的な WH 移動をした場合、LF でさらにWH 句を移動させることはできないという事実から、日本語の従属節があるWH 疑問文での従属節から主節への WH 句の移動は WH 移動であり、IP の付加への移動ではなく CP への移動であると述べている。

Takahashi (1993)は、短距離の WH 疑問文の場合、Superiority による文法性の違いは生み出さないが、長距離の WH 疑問文の場合は、Superiority による文法性の違いを生み出すと結論づけた。したがって、Takahashi (1993) は、長距離のWH 疑問文は、統語的なWH

移動であるとした。本研究では、Takahashi（1993）の理論を採用する。

第 3 章　WH 句が複数含まれる疑問文の文法性判断実験

3.1　調査の目的と仮説

本実験は、ロシア語の WH 句が複数ある WH 疑問文の文法理解に母語知識の介入と英語の知識の介入の可能性について、（1）Superiority による WH 疑問文の文法性判断の違い、（2）短距離の WH 疑問文と長距離の WH 疑問文による文法性判断の違いの 2 点から、仮説を検証することを目的とした実験である。

今回の実験に際し、第 1 章および第 2 章の先行研究を踏まえた仮説について述べる。仮説として 3 つの仮説が考えられる。

1 つ目は、日本語母語話者にとって L1 となる日本語の統語知識が L3 となるロシア語の WH 疑問文の文法性判断に影響を及ぼすという仮説である。この仮説は、日本語の短距離の WH 疑問文は Superiority による文法性の違反は生じないが、長距離の WH 疑問文は Superiority の有無によって文法性に差が生じるという Takahashi（1993）の主張を採用している。この仮説が正しければ、被験者はロシア語の WH 疑問文の文法性判断の際に、短距離の WH 疑問文は Superiority の有無に関らず文法的だと判断するが、Superiority を遵守していない長距離の WH 疑問文においては非文法的だと判断することが考えられる。本研究では、Takahashi（1993）が提唱した理論を採用し、日本語を L1 とするロシア語学習者は、この母語知識を有していると推定する。

2 つ目は、日本語母語話者にとって L2 となる英語の文法知識が L3 のロシア語の文法性判断に影響を及ぼす仮説である。英語の WH 疑問文の統語構造においては、Superiority のによって文法性に差が生じるという事象が見られる。これらの事象は、短距離の WH 疑問文と長距離の WH 疑問文のどちらにも同じ事象が見られる。このことから、仮説として、英語の統語知識がロシア語の統語知識に影響を及ぼすのならば、ロ短距離と長距離の WH 疑問文のどちらにおいても、被験者は Superiority を遵守している WH 疑問文を文法的だと判断し、Superiority を遵守していない WH 疑問文は非文法的だと判断することが予想され

る[9]。

3つ目は、L1 である日本語の知識も L2 である英語の知識もロシア語の文法性判断に影響を与えていないという仮説である。この仮説が正しければ、日本語の統語構造も英語の統語構造も影響を与えないため、被験者はロシア語のどの WH 疑問文でも Superiority の有無に関らずどちらも非文法的だと判断するか、どちらも文法的だと判断することが考えられる。この 3 つ目の仮説が正しいと仮定すると、英語とロシア語の WH 疑問文のどちらにも有意差が生じないことが見込まれる。これらの3つの仮説を検証していく。

3.2　文法性判断実験の実施

3.2.1　被験者

日本語を母語とし、第二言語が英語であるロシア語を学習している大学生 43 名を実験の対象者とした。43 名の大学生の内訳は、新潟県立大学でロシア語を学習している大学生 8 名、上智大学ロシア語学科でロシア語を学習している大学生 16 名、東京外国語大学言語文化学部でロシア語を専攻している大学生 19 名である。被験者は、3 つの大学すべてにおいて大学 2 年生から 4 年生までを対象とした。

3.2.2　調査方法

本実験は、文法性判断テストを用いて実施された。テストでは、文法的だと判断できるか非文法的だと判断できるかの〇✕による回答の方式で提示された問題の文が文法的に正しいか非文法的かの判断を行った。テストは Google Forms 形式によって実施され、英語とロシア語の学習歴と、英語とロシア語の資格を有しているかに関するアンケートへの回答を

[9] ただし、英語は被験者にとって L2 となるため、これは習得の度合いが問題となってくる。したがって、実際に英語母語話者と同様の Superiority に関する文法知識を有しているかどうかを検証しなければならない。詳細は、3.2 を参照のこと。

行ってもらい、次に、英語の複数の WH 句が含まれる WH 疑問文と Superiority を遵守していないことにより非文となる英語の WH 疑問文が文法的に正しい文であるか否かに関する問題 12 問の文法性判断を実施し、ロシア語の複数の WH 句が含まれる WH 疑問文が文法的に正しい文であるか否かに関して、2 つの WH 句が文頭へ移動した短距離の t WH 疑問文と長距離の WH 疑問文と、その移動された WH 句の語順を入れ替えた短距離の WH 疑問文と長距離の WH 疑問文の計 24 問を設定した。更に、フィラーとして 16 問を設定した。24 問の WH 句を 2 つ含む WH 疑問文と 16 問のフィラーを合わせた合計 40 問と、12 問の英語の WH 疑問文を合わせた 52 問の実験文を設定し、実験文に対してその文が文法的か非文法的かを判断する文法判断実験を実施した[10]。

3.2.3　実験で用いられた WH 疑問文の種類

本実験における実験文はそれぞれ、英語とロシア語の複数の WH 句が含まれる WH 疑問文を中心とし、英語に関しては WH 疑問文のみを実験文とし、ロシア語では WH 疑問文及びフィラーとして平叙文を実験文とした。英語とロシア語の WH 疑問文は、主語である who と直接目的語である whom を含む WH 疑問文、主語の who と Adjunct の when を含む WH 疑問文、直接目的語と Adjunct の when を含む WH 疑問文の 3 つのタイプの WH 疑問文を実験文として定めた。

1 つ目の WH 疑問文のタイプである主語と直接目的語の WH 疑問文の実験文として、（35）の文が挙げられる。

[10] 実際に使用した実験文は、appendix を参照のこと。

(35)　a.　Kto kogo videl ?
who whom saw
'Who saw whom ?'

b.　Kogo kto videl ?
whom who saw
'*Whom did who see ?'

この文の WH 句である who の意味を持つ Kto と whom の意味を持つ Kogo の語順は入れ替えることが出来るため、ロシア語においては Superiority による文法性の違反は生じない。これは、直接目的語が人物ではなく物体を指し示す what であった場合においても WH 句の語順によってもたらされる文法性の変化は起こらないが、この実験では主語の WH 句と直接目的語の WH 句を含む実験文として who と whom を用いた。2 つ目のタイプの主語と Adjunct の実験文として（36）の例が挙げられる。

(36)　a.　Kto kogda umiral ?
who when died
'Who died when ?'

b.　Kogda kto umiral ?
when who died
'*When did who die ?'

この文は、WH 句の who の意味を持つ主語の Kto と when の Adjunct の Kogda を含んだ WH 疑問文である。(36a)の疑問文は、主語の Kto が文頭になり、その次に Adjunct の WH 句の Kogda が移動さえた構造となり文法的である。（36b）のように主語と Adjunct の語順

を入れ替えた WH 疑問文は、主語と直接目的語の WH 疑問文と同様に Superiority による文法性の違反は生じない。これは WH 句の Adjunct が仮に where 等であったとしても、Superiority による文法性の違反は生じないが、この実験では主語と Adjunct の when を含む実験文を採用した。

3 つ目のタイプの直接目的語と Adjunct の実験文として、（37）の例が挙げられる。

（37）　a.　Čto　kogda　ty　kupil？
what　when　you buy
‘*What did you buy when ?’

b.　Kogda čto　ty　kupil？
when what you buy
‘When did you buy what ?’

この文はWH 句のwhat の意味を持つ直接目的語のčto とwhen の意味を持つkogda を含んだ形となる。この文では、Adjunct が when ではなく where 等の意味を持つ WH 句であったとしても、直接目的語と Adjunct のWH 句の Superiority による文法性の変化は変わらないが、この実験では直接目的語のwhat と Adjunct の when の意味を持つ実験文を採用した。短距離の WH 疑問文の実験文と同様に、長距離の WH 疑問文の実験文も主語のWH 句と直接目的語の WH 句を含む WH 疑問文、主語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む WH 疑問文、直接目的語と Adjunct を含む WH 疑問文の 3 つのパターンを取り上げた。

英語の実験文でも、ロシア語の実験文と同様に主語と直接目的語の WH 疑問文、主語と Adjunct の WH 疑問文、直接目的語と Adjunct の 3 つのタイプの WH 疑問文を扱った。ロシア語では 1 つのタイプにつき 2 つの実験文を使用したが、英語では 1 つの WH 疑問文のタイプにつき 1 つの実験文を使用した。英語は、被験者にとって L2 となるため、英語の

WH 句を含む WH 疑問文がSuperiority によって文法性に差が生じるという事象を正しく習得できているかどうかを調査する必要がある。そのため英語の WH 句を複数含む WH 疑問文の文法性判断も併せて実施した。

英語の実験文として、（38）のような主語と直接目的語のWH句を含むWH疑問文が挙げられる

（38）　a.　　Who met whom?

　　b.　　*Whom did who met?

（38a）の文は、主語と直接目的語のWH疑問文であり、上位に位置する主語のWH句のwhoが文頭へ移動し、下位に位置する直接目的語の WH 句のwhom が in-situ となる実験文であり、文法的となる。（38b）は、上位に位置する主語のWH句の who を飛び越えて、下位に位置するWH句のwhom が文頭へ移動し、Superiority を遵守しないため非文法的となる。

次に、2 つ目のタイプの実験文として、（39）のような主語と Adjunct のWH句を含むWH疑問文を設定した。

（39）　a.　　Who got up when?

　　b.　　*When did who get up?

（39a）では、上位に位置する主語の who が文頭へ移動し、下位に位置する Adjunct の when が in-situ となるため文法的となるが、(39b)は、下位に位置する Adjunct のwhen が、上位に位置する主語のwho を飛び越えて文頭へ移動するため、非文法的となる。

次に、3 つ目のタイプの実験文として、(40)のような直接目的語の what と Adjunct のWH句を含むWH疑問文を設定した。

（40）　a.　　*What did you eat when?

　　b.　　When did you eat what?

（40a）の実験文は、直接目的語の what が文頭へ移動し、Adjunct の when が in-situ となっており、非文法的な WH 疑問文となる。（40b）の実験文は、Adjunct の when が文頭へ移動し、直接目的語の what が in-situ となる WH 疑問文であり、文法的な WH 疑問文となる。

英語の長距離の WH 疑問文の実験文においても、短距離の WH 疑問文の実験文と同様に、主語と直接目的語、主語と Adjunct、直接目的語と Adjunct の 3 つのタイプの WH 疑問文を取り扱い、1 つのタイプの WH 疑問文につき、2 ペアの実験文を取り扱った。

3.3　文法性判断実験の結果と考察

3.3.1　被験者の回答データ

表 1 は、ロシア語の WH 句を複数含む WH 疑問文を Superiority を遵守したか否かに関わらず文法的だと判断した回答の割合をまとめたものである。

表1 ロシア語の正答率のデータ

		東京外大	上智	新潟	合計（%）	合計（%）
short	Subj-Obj	27/38	21/32	5/16	62% 53/86	48%
	Subj-Ad	18/38	16/32	4/16	44% 38/86	124/258
	Obj-Ad	15/38	15/32	3/16	38% 33/86	
	Obj-Subj	23/38	19/32	1/16	50% 43/86	44%
	Ad-Subj	12/38	14/32	3/16	45% 39/86	114/258
	Ad-Obj	13/38	14/32	3/16	35% 30/86	
Long	Subj-obj	7/38	9/32	4/16	23% 20/86	19%
	Subj-Ad	6/38	4/32	1/16	12% 11/86	48/258
	Obj-Ad	7/38	10/32	0/16	20% 17/86	
	Obj-Subj	7/38	8/32	2/16	20% 17/86	23%
	Ad-Subj	6/38	12/32	5/16	27% 23/86	
	Ad-Obj	7/38	9/32	3/16	22% 19/86	59/258

表２は、東京外国語大学、上智大学、新潟県立大学の全ての被験者の回答に対して、WH疑問文のタイプ別に、Superiority を遵守しているWH疑問文と Superiority を遵守していないWH疑問文を比較して出た統計を示したものである。表２の平均値の満点の値は、２点とである。

表２　ロシア語の統計データ

		平均値	標準偏差	P 値
Short	Subj-Obj	1.23255814	0.868419728	0.218968247
	Obj-Subj	1	0.872871561	
	Subj-Ad	0.88372093	0.905257194	0.261354205
	Ad-Subj	0.674418605	0.808317778	
	Obj-Ad	0.790697674	0.832613199	0.89774887
	Ad-Obj	0.76744186	0.840555635	
Long	Subj-Obj	0.465116279	0.667220147	0.627116514
	Obj-Subj	0.395348837	0.659708986	
	Subj-Ad	0.255813953	0.581173823	0.098335904
	Ad-Subj	0.488372093	0.702786733	
	Obj-Ad	0.441860465	0.733625231	1
	Ad-Obj	0.44186047	0.628767713	

被験者全体としてロシア語のWH 句が複数文頭へ移動し、Superiority を遵守しているWH疑問文とSuperiority を遵守していない WH 疑問文の間で有意差が示されたかどうかを見る必要がある。実験の結果、ロシア語の主語の WH 句と直接目的語の WH 句を含む短距離の WH 疑問文の有意差に関して生じなかった（$p=0.21$, $p>0.05$）。さらに、ロシア語の主語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む短距離の WH 疑問文に関して有意差は生じなかった（$p=0.26$, $p>0.05$）。直接目的語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む短距離の WH 疑問文に関して有意差は生じなかった（$p=0.89$, $p>0.05$）。長距離の WH 疑問文の結果についても述べる。主語の WH 句と直接目的語の WH 句を含む長距離の WH 疑問文の有意差は生じな

かった（p=0.62, p＞0.05）。主語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む WH 疑問文の有意差は生じなかった（p＝0.09, p＞0.05）。直接目的語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む WH 疑問文の有意差は生じなかった（p＝1, p＞0.05）。以上の点から、ロシア語ではすべての WH 疑問文のタイプにおいて有意差は生じなかったことが結果として示された。

表 3 は、英語の WH 句が複数ある WH 疑問文に対し、Superiority に関わらず文法的だと判断した東京外国語大学、上智大学、新潟県立大学の被験者の割合を示したものである。つまり、被験者の正答率の割合が低いものは、文法的だと回答した被験者が少ないことを示している。

表 3　英語の正答率のデータ

		東京外大	上智	新潟	合計（%）	合　計（%）
Short	Subj-Obj	16 /19	8/16	4/8	65% 28/43	30% 39/129
	Subj-Ad	2/19	2/16	0/8	9% 4/43	
	Obj-Ad	1/19	4/16	2/8	16% 7/43	
	Obj-Subj	3/19	1/16	0/8	9% 4/43	21% 28/129
	Ad-Subj	3/19	3/16	2/8	18% 8/43	
	Ad-Obj	5/19	8/16	3/8	37% 16/43	
Long	Subj-Obj	5/19	6/16	2/8	30% 13/43	18% 24/129
	Subj-Ad	0/19	4/16	0/8	9% 4/43	
	Obj-Ad	0/19	7/16	0/8	16% 7/43	
	Obj-Subj	0/19	3/16	2/8	11% 5/43	12% 16/129
	Ad-Subj	2/19	4/16	0/8	13% 6/43	
	Ad-Obj	1/19	4/16	0/8	11% 5/43	

表4は、被験者一人ひとりの英語の WH 句が複数ある WH 疑問文を Superiority を遵守しているか否かに限らず、文法的に正しいと回答した数をもとに統計をかけて出たデータである。

表4　英語の統計データ

		平均	標準偏差	P 値
Short	Subj-Obj	0.651163	0.482242822	0.00000001121616741
	Obj-Subj	0.093023	0.293902599	
	Subj-Ad	0.093023	0.293902599	0.2181608300931760
	Ad-Subj	0.186047	0.393749615	
	Obj-Ad	0.162791	0.373543684	0.02859
	Ad-Obj	0.372093	0.489083488	
Long	Subj-Obj	0.325581	0.474137324	0.1415148589
	Obj-Subj	0.186047	0.393749615	
	Subj-Ad	0.116279	0.324353006	0.750309227263966
	Ad-Subj	0.139535	0.350604604	
	Obj-Ad	0.209302	0.411625091	0.247909
	Ad-Obj	0.116279	0.324353006	

英語の主語のWH 句と直接目的語のWH 句を含む短距離のWH 疑問文において、有意差が生じた（$p=0.00000001$, $p<0.05$）。主語の WH 句と Adjunct のWH 句を含む短距離の WH 疑問文においては有意差は生じなかった（$p=0.21$, $p>0.05$）。直接目的語のWH 句と Adjunct のWH 句を含む短距離のWH 疑問文において有意差が生じた（$p=0.02$, $p<0.05$）。主語の WH 句と直接目的語のWH 句を含む長距離のWH 疑問文においては、有意差は生じなかった（$p=0.14$, $p>0.05$）。主語の WH 句と Adjunct の WH 句を含む長距離のWH 疑問文においても、有意差は生じなかった（$p=0.75$, $p>0.05$）。直接目的語の WH 句と Adjunct のWH 句を含む長距離のWH 疑問文においても有意差は生じなかった（$p=0.24$, $p>0.05$）。以上の点から、英語では、主語のWH 句と直接目的語のWH 句を

含む短距離のWH 疑問文と、直接目的語と Adjunct の WH 疑問文を含む短距離のWH 疑問文では有意差が生じたが、それ以外のWH 疑問文のタイプでは有意差が生じないという結果となった。

3.3.2 全体データの結果

英語の短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文で有意差が生じたという結果は、英語の主語の WH 句と直接目的語の WH 句を含む短距離の WH 疑問文は Superiority の有無によって文法性に違いが生じるということを被験者は正しく判断していたことを示している。短距離の直接目的語と Adjunct の WH 疑問文でも有意差が生じているが、文法的であるとされる Adjunct と直接目的語の WH 疑問文の平均点が 1 点中 0.37 点と低く、この有意差をもって英語の superiority による文法性の違いが理解されているとは断定できない。このことから、英語の短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文以外の WH 疑問文に関しては、ロシア語学習者はその文法性の知識を得ていないことが確認された。しかしながら、有意差と平均点だけでは、L2 から L3 への転移が生じていたかどうかは断言できない。L2 から L3 への転移が生じていた可能性は、全体データだけではなく、個人データの分析をしていく必要がある。

ロシア語の被験者の L1 となる日本語では、短距離の WH 疑問文では Superiority の有無によって文法性に差は生じないが、長距離の WH 疑問文では Superiority の有無によって文法性に差が生じることは 3.1 にて既に述べた。本研究では、ロシア語学習者は、日本語の WH 疑問文が短距離と長距離の間でで Superiority によって文法性に差が生じるという母語知識を有しているものとする。そのため、この仮説が正しいと仮定すると、L1 の日本語の Superiority による文法性の知識がロシア語の文法性判断に転移した場合、ロシア語の統計データで短距離の WH 疑問文では有意差は生じないが、長距離の WH 疑問文では有意差が生じるという結果が予想される。しかしながら、実際のロシア語の文法性判断データの結果

は、短距離の WH 疑問文では有意差が生じず、長距離のどのタイプの WH 疑問文においても有意差は生じなかった。更に、平均点に関しては、L1 から L3 への転移が生じていた場合、短距離の WH 疑問文の平均点は、短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文と同等の平均点が出ることが予想されるが、実際は、ロシア語の短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文に関して、Superiority を遵守している文の平均点は、2 点満点中 1.37 という高い値が出て、Superiority を遵守していない文は、1 点という値が出たが、それ以外の短距離の WH 疑問文の平均点は、1 点未満であった。本研究では、母語転移は、WH 移動が文の構造によって選択的に生じることを想定していない。したがって、L1 から L3 への転移は生じていないことが考えられる。

全体の結果から、L1 から L3 への転移は生じていないことが示されたが、L2 から L3 への転移は生じていたかどうかは、明らかになっていない。そこで、L2 から L3 への転移が生じていたかどうかについて、個人データの分析をしていく。

3.3.3 個人データの結果

個人データでは、ロシア語の WH 句を複数含む WH 疑問文に関して、12 問中 9 問以上を正しいと回答した被験者が実験の結果見られた[11]。短距離の WH 疑問文の実験文に関して、12 問中 9 問以上を文法的に正しいと判断した被験者は、43 人中 13 人であった。一方で、短距離の WH 疑問文の実験文を概ね正しいと判断した 13 人の被験者のうち、長距離の WH 疑問文の実験文の設問 12 問のうち 9 問以上を文法的に正しい文だと判断した被験者は 2 人であった。逆に、短距離の WH 疑問文を 12 問中 9 問以上非文法的だと回答した被験者は、17 人であった。短距離の WH 疑問文を非文法的だと判断した 17 人の被験者は、長距離の WH 疑問文についても 12 問中 9 問以上非文法的だと判断していた。ロシア語は、英語と同

[11] 本論では、ロシア語の WH 疑問文の設問 12 問中 9 問以上を文法的だと判断した被験者は、ロシア語の WH 疑問文を Superiority に関わらず文法的だと判断していた被験者とする。

じように主語、動詞、目的語の語順の言語であるが、WH 句が複数含まれる WH 疑問文の場合は、英語とは異なり 2 つの WH 句が顕在的に文頭へ移動しなければならないという特徴を持っている。L2 である英語がロシア語に影響を及ぼすとした場合、ロシア語学習者は英語にはないロシア語の文法特性である WH 句が複数文頭へ移動するということを許容しないことが可能性として考えられたが、実験の結果、短距離の WH 疑問文を概ね文法的だと判断していた被験者が約 3 割いたという事実により、短距離の WH 疑問文において、2 つの WH 句が文頭へ移動するという構造が非文法性を生み出しているわけではないと判断しているロシア語学習者がいる可能性が示唆された。つまり、ロシア語の複数の WH 句が文頭へ移動するというロシア語の文法性をある程度習得できていた学習者がいたという事が分かる。そして、短距離の WH 疑問文を 12 問中 9 問以上文法的だと判断し、長距離の WH 疑問文の判断した数が 12 問中 8 問以下の被験者が 11 人いたことから、11 人の被験者は、長距離の WH 疑問文を Superiority に関わらず文法的だと判断した数が短距離の WH 疑問文よりも減ったと言える。このことから、11 人の被験者は、ロシア語の長距離の WH 疑問文においては、従属節から主節の文頭へ 2 つの WH 句を移動させること自体が、短距離の WH 疑問文と比較すると、非文法性を生み出すと判断していた可能性が示唆される。短距離の WH 疑問文と長距離の WH 疑問文をどちらも概ね非文法的だと判断していた 17 人の被験者は、ロシア語では、2 つの WH 句が文頭へ移動すること自体が非文法性を生じさせると判断した可能性が考えられる。

次に、英語の WH 疑問文に対し、Superiority を遵守している文を文法的だと判断し、Superiority を遵守していない文を非文法的だと判断していた被験者の割合について見ていく。6 問中 5 問以上の英語の短距離の WH 疑問文の文法性を正しく判断していた被験者は、43 人中 1 人のみであった[12]。つまり、43 人中 42 人の被験者は、英語の短距離の WH 疑問

[12] 本論では、英語のの WH 疑問文の設問 6 問中 5 問以上を文法的だと判断した被験者は、英語の WH 疑問文を Superiority に関わらず文法的だと判断していた被験者とする。

文の Superiority による文法性の違いを概ね正しく判断できていなかったことになる。しかしながら、主語と直接目的語の短距離の WH 疑問文に関しては、Superiority によって文法性に差が出ると判断した被験者は、短距離の WH 疑問文を 6 問中 5 問以上を Superiority による文法性の差を正しく判断できていた被験者を除くと、23 人であった。以上の点から、その 23 人の被験者は、英語の短距離の WH 疑問文に関して、主語と直接目的語の WH 疑問文に関しては、2 つの WH 句が文中に存在することを認可し、かつ、Superiority を遵守しているか否かによって文法性に差が出ることを認識できていたことがうかがえる。つまり、英語において、主語と直接目的語の短距離の WH 疑問文の場合は、WH 句が 2 つ文中に存在し、下位の WH 句が上位の WH 句を飛び越えた場合、非文になることを習得できていた可能性が示唆される。

英語の長距離の WH 疑問文に関して、6 問中 5 問以上を文法的だと判断していた被験者は、0 人であった。更に、英語の短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文に対しては、Superiority による文法性の違いを正しく判断できていた被験者が 43 人中 23 人だったのに対し、英語の長距離の主語と直接目的語の WH 疑問文に関しては、Superiority による文法性の違いを正しく判断できていた被験者は、43 人中 11 人であった。この 11 人の中で、短距離の主語と直接目的語の WH 句を含む WH 疑問文に対しても、Superiority による文法性の差を正しく判断できていた被験者は、8 人であった。これにより、長距離の主語と直接目的語の WH 句を含む WH 疑問文の Superiority による文法性の差を正しく判断できている被験者の数は、短距離の主語と直接目的語の WH 句を含む WH 疑問文の文法性を正しく判断できていた被験者の数と比較すると、少ないことが確認された。更に、WH 句を複数含む長距離の WH 疑問文が概ね文法的であると判断できていた被験者は見られないことが確認された。このことから、英語の長距離の WH 疑問文に関して、一方の WH 句が主節の文頭へと移動し、もう一方の WH 句が従属節内で in-situ となる文法性を許容しない被験者の存在が示唆された。また、主語と直接目的語の WH 疑問文において、短距離と長距離の WH

疑問文が Superiority によって文法性に差が生じることを正しく判断できていた被験者と、短距離では、Superiority による文法性の差を正しく判断できていたが、長距離では Superiority による文法性の差を正しく判断できていない被験者が見られたことから、前者の被験者は、下位の WH 句が in-situ となり、上位の WH 句の従属節から主節への移動自体は非文法性を生み出さないと判断した可能性が示唆される。更に、後者の被験者は、従属節から主節へ WH 句が移動すること自体が非文法性を生み出すと判断した可能性が示唆される。

更に、ロシア語と英語の短距離の WH 疑問文と長距離の WH 疑問文をすべて Superiority に関わらず非文法的だと判断した被験者は、3 人であった。この 3 人は、ロシア語でも英語でも WH 疑問文の種類や移動の特性に関わらず、2 つの WH 句が文中に存在することが非文法性を生み出すと判断した可能性が考えられる。

次に、個人データにおいて L2 である英語から L3 であるロシア語への転移が生じているかどうかについて述べる。前述したように、ロシア語の WH 句を複数含む短距離の WH 疑問文の設問 12 問中 9 問以上を正しいと回答した被験者は 13 人いたと述べた。その 13 人のうち、9 人はロシア語の主語と直接目的語の WH 句を含む短距離の WH 疑問文に関して、設問として設定した 4 問すべてを Superiority に関わらず文法的となると判断していた。それ以外の 4 人の被験者に関しては、1 人がロシア語の主語と直接目的語の短距離の WH 疑問文に対し、4 問中 2 問を文法的だと判断し、3 人は 4 問中 3 問を文法的だと判断していた。ロシア語の短距離の WH 疑問文を概ね文法的だと判断していた 13 人の被験者は、英語の主語の WH 句と直接目的語の WH 句を含む短距離の WH 疑問文に関して、Superiority を遵守している WH 疑問文を文法的とし、Superiority を遵守していない WH 疑問文を非文法的であると判断していた 8 人の被験者と、Superiority に関わらず非文法的だと判断していた 3 人の被験者と、Superiority に関わらず文法的だと判断していた 2 人の被験者に分かれた。このことから、英語の主語と直接目的語の短距離の WH 疑問文は、Superiority によっ

て文法性に差が生じるが、ロシア語では文法性に差が生じないため、転移が生じていると仮定した場合、英語で下した文法性判断をロシア語でも同様に下すことが見込まれたが、実際は、英語とロシア語では異なる判断を下している被験者が見られた。したがって、短距離の主語と直接目的語の WH 疑問文において、L2 から L3 への転移は生じていない可能性が考えられる。一方で、英語の主語と直接目的語の WH 疑問文に関して Superiority に関わらず文法的となると下した判断をロシア語でも同様に判断した被験者がいたことから、英語の場合は Superiority に関わらず WH 疑問文は文法的となるという間違った判断が、L3 の文法性判断に影響を及ぼした可能性が示唆される。

英語の短距離の WH 疑問文で Superiority を遵守している文を文法的と判断し、Superiority を遵守していない文を非文法的だと概ね正しく判断できていた 1 人の被験者は、ロシア語の短距離の WH 疑問文に対しては、主語と直接目的語の WH 疑問文を Superiority に関わらず文法的だと判断し、それ以外の WH 疑問文に関しては、8 問中 5 問を非文法的だと判断していた。よって、その被験者は、短距離の WH 疑問文に関しては、L2 から L3 への転移は生じていないと考えられる。

ロシア語の短距離の WH 疑問文と英語の短距離の WH 疑問文をすべて非文法的だと判断していた被験者は 3 人であった。この 3 人に関しては、英語の短距離の WH 疑問文とロシア語の短距離の WH 疑問文のどちらにおいても、Superiority に関わらず非文法的だと判断したことから、WH 句が文中に 2 つ存在すること自体が非文法性を生み出していると判断した可能性が考えられる。そのため、L2 から L3 への転移が生じていたとは断言できない。

以上の点から、個別データの結果、短距離の WH 疑問文に関して、L2 から L3 への転移が生じていないことが確認された。また、被験者によっては、英語の短距離の WH 疑問文の Superiority による文法性の違いに対する間違った判断が、L3 へ転移した可能性も示唆された。

次に、ロシア語の長距離の WH 疑問文において 12 問中 9 問以上を文法的だと判断してい

た 2 人の被験者は、英語の長距離の WH 疑問文に対して、一方の被験者は、すべての設問を非文法的だとし、もう一方の被験者は、主語と直接目的語の WH 疑問文に関してのみ、文法性の違いを正しく判断していたが、それ以外の WH 疑問文に対しては、主語と Adjunct の WH 疑問文の場合においてのみ、Superiority に関わらず文法的だと判断し、直接目的語と Adjunct の WH 疑問文に関しては、非文法的となる直接目的語が Adjunct を先行する文法的と判断していたため、文法性を正しく判断できていなかった。したがって、一方の被験者に関しては、L2 から L3 への転移は見られないことが確認されたが、もう一方の被験者に関しては、主語と Adjunct の WH 疑問文に関しては、Superiority に関わらず文法的となると判断していたことから、WH 疑問文の種類によっては、L2 の間違った判断が L3 に影響を与えた可能性は否定できない。つまり、WH 疑問文の種類によって、L2 の間違った判断が L3 への転移が生じた可能性が考えられる。

ロシア語の長距離の WH 疑問文をすべて非文法的だと判断し、英語の長距離の WH 疑問文においてもすべて非文法的だと判断していた被験者は 12 人であった。つまり、12 人の被験者は、長距離の WH 疑問文においては、2 つの WH 句が文中に存在することを認可していない可能性がある。そのため、L2 に関する知識が L3 へ影響を与えたとは断言できない。

これらのことを踏まえると、転移に関して、4 つのタイプを示したロシア語学習者の存在が示唆された。1 つ目として、L2 から L3 への転移が見られないロシア語学習者である。2 つ目として、被験者が持つ間違った L2 に対する文法知識が、L3 に影響を及ぼした可能性のあるロシア語学習者である。3 つ目として、英語とロシア語では、そもそも 2 つの WH 句が文中に現れる文そのものが非文だと判断していたロシア語学習者である。4 つ目として、WH 疑問文の種類によって、転移が発生した可能性のあるロシア語学習者である。

第 4 章　おわりに

本研究は、ロシア語の WH 句を複数含む WH 疑問文を、L1 を日本語、L2 を英語、L3 をロシア語とするロシア語学習者は、文法的な文だと判断するのか否かについてと、その判断には、L1 と L2 のどちらの統語知識が転移が関わるのかどうかについての 2 つを目的とした研究を行った。

本研究を通じて、日本語を L1 とし、英語を L2 とするロシア語学習者は、ロシア語の WH 句を複数含む WH 疑問文に対し、文法性判断実験の検証を行ったところ、L1 から L3 への転移は見られないことが確認された。そして、L2 から L3 への転移に関しては、WH 疑問文の種類によって L2 から L3 への転移が生じた可能性のある学習者と、WH 疑問文の種類に関わらず転移が生じなかった可能性のある学習者と、L2 に対する間違った文法知識が L3 へ転移した可能性のある学習者に分かれた。したがって、個別データの検証の結果、L1 transfer ではなく、L2 status factor モデルが、WH 疑問文の種類によっては生じた被験者の存在が示唆されたが、全体では L2 から L3 への転移は生じないことが分かった。更に、特筆すべきこととして、ロシア語の WH 句を複数含む WH 疑問文が Superiority に関わらず概ね文法的となると判断できていた学習者がいたことから、学習経験が少ない可能性が高いと思われる WH 句が複数含まれる WH 疑問文という言語表現に対し、ロシア語において複数の WH 句が文頭へ移動するという構造を許容した学習者がいたことが確認された。一方で、ロシア語の WH 疑問文と英語の WH 疑問文をすべて非文法的だと判断していた学習者がいたことから、複数の WH 句が文中に存在する WH 疑問文自体を許容しなかった学習者がいた可能性が示唆される。

Appendix

東京外国語大学の学生によるロシア語の短距離 WH 疑問文に対する回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
ロシア語学習年	4	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	1	3	3	3	3	4	2	3	
Kto kogo videl?	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	Who saw whom?
Kogo kto videl?	×	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	*Whom did who see?
Kto kogo ljubil?	○	○	×	○	○	○	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	Who loved whom
Kogo kto ljubil?	×	×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	*Whom did who love?
Kto kogda umiral?	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	○	×	×	○	○	Who died when?
Kogda kto umiral?	×	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	*When did who die?
Kto kogda prišël?	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○	Who came when?
Kogda kto prišël?	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	○	*When did who come?
Čto kogda ty kupil?	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○	×	*What did you buy when?
Kogda čto ty kupil ?	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	○	○	×	○	○	When did you buy what?
Čto kogda ty el?	○	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	*What did you eat when?
Kogda čto ty el?	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	When did you eat what?

東京外国語大学の学生による英語の短距離 WH 疑問文に対する回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
英語学習年	8	8	8	8	8	8	8	8	6	8	8	8	7	8	8	8	7	8	6
Who met whom?	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
*Whom did who meet?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○
Who got up when?	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
*When did who got up?	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
*What did you eat when?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
When did you eat what?	×	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×

東京外国語大学の学生によるロシア語の長距離 WH 疑問文に対する回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
ロシア語の学習年	4	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	1	3	3	3	3	4	2	3	
Kto kogo ty xočeš',čtoby videl?	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○	×	Who do you want to see whom?
Kogo kto ty xočeš', čtoby videl?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	*Whom do you want who to see?
Kto kogo ty želaeš', čtoby ljubil?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	Who do you hope to love whom?
Kogo kto ty želaeš', čtoby ljubil?	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○	*Whom do you hope who to love?
Kto kogda ty xočeš', čtoby umiral?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	○	Who do you want to die when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby umiral?	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	*When do you want who to die?
Kto kogda ty xočeš', čtoby prišël?	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	Who do you want to come when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby prišël?	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	*When do you want who to come?
Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan kupil?	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	*What do you want him to buy when?
Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan kupil?	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	When do you want him to buy what?
Čto kogda ty xočes', čtoby Ivan el?	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	○	*What do you want Ivan to eat when?
Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan el?	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	○	When do you want Ivan to eat what?

東京外国語大学の学生による英語の長距離 WH 疑問文に対する回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
英語学習年	8	8	8	8	8	8	8	8	6	8	8	8	7	8	8	8	7	8	6
Who do you think loved whom?	×	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○
*Whom do you think who loved?	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○
Who do you want to go shopping when?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
*When do you want who to go shopping?	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
When do you think he bought what?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
*What do you think he bought when?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

上智大学の学生によるロシア語の短距離の WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
ロシア語学習年	4	2	2	3	4	4	4	3	3	3	1	3	2	1	4	1	
Kto kogo videl?	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	Who saw whom?
Kogo kto videl?	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	*Whom did who see?
Kto kogo ljubil?	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	Who loved whom?
Kogo kto ljubil?	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	*Whom did who love?
Kto kogda umiral?	○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○	○	×	Who died when?
Kogda kto umiral?	○	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○	○	○	×	×	*When did who die?
Kto kogda prišël?	○	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○	×	○	○	×	Who came when?
Kogda kto prišël?	○	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×	○	×	○	×	×	*When did who come?
Čto kogda ty kupil?	○	×	×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	*What did you buy when?
Kogda čto ty kupil ?	×	×	×	○	○	×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	When did you buy what?
Čto kogda ty el?	×	×	×	○	○	×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	*What did you eat when?
Kogda čto ty el?	○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○	×	×	When did you eat what?

上智大学の学生による英語の短距離の WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
英語の学習年	8	8	8	7	7	7	8	8	8	8	8	5	8	7	8	8
Who met whom?	×	×	×	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	○	○
*Whom did who meet?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
Who got up when?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
*When did who got up?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○
*What did you eat when?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×
When did you eat what?	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	○

上智大学の学生によるロシア語の長距離 WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
ロシア語学習年	4	2	2	3	4	4	4	3	3	3	1	3	2	1	4	1	
Kto kogo ty xočeš',čtoby videl?	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	Who do you want to see whom?
Kogo kto ty xočeš', čtoby videl?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	*Who do you want whom to see?
Kto kogo ty želaeš', čtoby ljubil?	×	×	×	○	×	○	○	×	○	○	×	○	×	×	×	×	Who do you hope to love whom?
Kogo kto ty želaeš', čtoby ljubil?	○	×	×	○	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	*Who do you hope whom to love?
Kto kogda ty xočeš', čtoby umiral?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	Who do you want to die when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby umiral?	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	×	×	○	×	×	*When do you want whom to die?
Kto kogda ty xočeš', čtoby prišël?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	Who do you want to come when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby prišël?	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	*When do you want whom to come?
Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan kupil?	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×	*What do you want him to buy when?
Kogda čto tyxočeš', čtoby Ivan kupil?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	When do you want him to buy what?
Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan el?	○	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	*What do you want Ivan to eat when?
Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan el?	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	When do you want Ivan to eat what?

上智大学の学生による英語の長距離 WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
英語の学習年	8	8	8	7	7	7	8	8	8	8	8	5	8	7	8	8
Who do you think loved whom?	×	○	×	○	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×
*Who do you think who loved?	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○
Whom do you want to go shopping when?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×
*When do you want who to go shopping?	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×	×
When do you think he bought what?	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	○
*What do you think he bought when?	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×

新潟県立大学でロシア語を学習している大学生によるロシア語の短距離 WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	
ロシア語の学習年	1	1	1	3	1	1	4	3	
Kto kogo videl?	×	×	×	○	×	×	×	×	Who saw whom?
Kogo kto videl?	×	×	×	×	×	×	×	×	*Whom did who see?
Kto kogo ljubil?	×	○	×	○	○	×	○	×	Who loved whom
Kogo kto ljubil?	×	×	×	○	×	×	×	×	*Whom did who love?
Kto kogda umiral?	○	×	○	×	×	×	×	×	Who died when
Kogda kto umiral?	○	×	○	×	×	×	×	×	*when did who die?
Kto kogda prišël?	×	×	○	○	×	×	×	×	Who came when?
Kogda kto prišël?	×	×	×	○	×	×	×	×	*When did who come?
Čto kogda ty kupil?	×	×	×	○	○	×	×	×	*What did you buy when?
Kogda čto ty kupil ?	○	×	○	○	○	×	×	×	When did you buy what?
Čto kogda ty el?	×	×	×	○	×	×	×	×	*What did you eat when?
Kogda čto ty el?	○	○	×	○	×	×	×	×	When did you eat what?

新潟県立大学でロシア語を学習している大学生による英語の短距離 WH 疑問文に対する回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8
英語の学習年	8	8	8	8	7	8	7	8
Who met whom?	×	×	×	○	×	○	○	○
*Whom did who meet?	×	×	×	×	×	×	×	×
Who got up when?	×	×	×	×	×	×	×	×
*When did who got up?	×	×	×	○	×	×	○	×
*What did you eat when?	×	×	×	○	○	×	×	×
When did you eat what?	×	×	×	○	○	×	○	×

新潟県立大学のロシア語を学習している大学生による長距離 WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	
ロシア語の学習年	1	1	1	3	1	1	4	3	
Kto kogo ty xočeš', čtoby videl?	×	×	×	○	×	×	×	×	Who do you want to see whom?
Kogo kto ty xočeš', čtoby videl?	×	×	×	○	×	×	×	×	*Who do you want whom to see?
Kto kogo ty želaeš', čtoby ljubil?	×	○	×	○	×	×	○	×	Who do you hope to love whom?
Kogo kto ty želaeš', čtoby ljubil?	×	×	×	○	×	×	×	×	*Who do you hope whom to love?
Kto kogda ty xočeš', čtoby umiral?	×	×	×	×	×	×	×	×	Who do you want to die when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby umiral?	○	×	×	○	×	×	×	×	*When do you want whom to die?
Kto kogda ty xočeš', čtoby prišël?	×	×	×	○	×	×	×	×	Who do you want to come when?
Kogda kto ty xočeš', čtoby prisël?	○	×	○	○	×	×	×	×	*When do you want whom to come?
Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan kupil?	×	×	×	×	×	×	×	×	*What do you want him to buy when?
Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan kupil?	○	×	×	○	×	×	×	×	When do you want him to buy what?
Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan el?	×	×	×	×	×	×	×	×	*What do you want Ivan to eat when?
Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan el?	×	×	○	×	×	×	×	×	When do you want Ivan to eat what?

新潟県立大学のロシア語を学習している大学生による英語の長距離 WH 疑問文の回答

被験者番号	1	2	3	4	5	6	7	8
英語学習年	8	8	8	8	7	8	7	8
Who do you think loved whom?	×	×	×	○	×	×	○	×
*Whom do you think who loved?	×	×	×	○	×	○	×	×
Who do you want to go shopping when?	×	×	×	×	×	×	×	×
*When do you want who to go shopping?	×	×	×	×	×	×	×	×
When do you think he bought what?	×	×	×	×	×	×	○	×
*What do you think he bought when?	×	×	×	×	×	×	×	×

文法性判断実験で使用された実験文

1. Kto kogo videl?

2. Kogo kto videl?

3. Kto kogo ljubil?

4. Kogo kto ljubil?

5. Kto kogda umiral?

6. Kogda kto umiral?

7. Kto kogda prišol?

8. Kogda kto prišol?

9. Čto kogda ty kupil?

10. Kogda čto ty kupil ?

11. Čto kogda ty el?

12. Kogda čto ty el?

13. Kto kogo ty xočeš', čtoby videl?

14. Kogo kto ty xočeš', čtoby videl?

15. Kto kogo ty želaeš', čtoby　　ljubil?

16. Kogo kto ty želaeš', čtoby ljubil?

17. Kto kogda ty xočeš', čtoby umiral?

18. Kogda kto ty xočeš', čtoby umiral?

19. Kto kogda ty xočeš', čtoby prišel?

20. Kogda kto ty xočeš', čtoby prišel?

21. Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan kupil?

22. Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan kupil?

23. Čto kogda ty xočeš', čtoby Ivan el?

24. Kogda čto ty xočeš', čtoby Ivan el?

Filler

25. Ivan smotrit televizor.

    Ivan watches TV-ACC

    Ivan is watching TV.

26. Saša napisal novuju pesnju.

    Sasha wrote new song

    Sasha wrote a new song.

27. *Ivan citaet casto gazetu.

    Ivan reads often newspaper

    *Ivan reads often the newspaper.

28. Ja kupil vina.

    I bought wine

    I bought wine.

29. *Saša budet napisal novuju pesnju.

    Sasha will wrote new song

    '*Sasha will wrote a new song.'

30. Ja našel Sašu.

I found Sasha ‘I

found Sasha.’

31. *Aleksandra kupil.

Alexandora bought

‘*Alexandor bought.’

32. *Saša sprosil vopros.

Sasha asked question

‘Sasha asked a question.’

33. Studenty kupili kunigi.

Student bought books

‘The students bought books.’

34. Ja dumaju, čto Ivan smotrit televizior.

I think that Ivan watches TV

‘I think that Ivan is watching TV.’

35. *Ja budu sprošil, smotrit li Ivan televizor.

I will asked watches q Ivan TV

‘*I will asked whether Ivan is watching TV.’

36. Ja xoču, čtoby Ivan pozvonil Maše.

I want that Ivan phone Masha

‘I want Ivan to phone Masha’.

37. *Ja nadejus, smotrit li Ivan televizor.

I hope watches q Ivan TV

‘*I hope if Ivan is watching TV.’

38. Boris xočet, čtoby Ivan chitaet kuniga.

Boris want that Ivan read book

‘Boris wants Ivan to read a book.’

39. *Ja dumaju, čto Ona možet pela.

I think that she can sang

*’I think that she can sang.’

40. Boris sprasil Slavku o sebe.

Boris asked Slavca about self

‘Boris asked Slavka about himself.’

文法性判断実験で使用された英語の WH 疑問文の実験文

1. Who met whom?

2. *Whom did who meet?

3. Who got up when?

4. *When did who got up?

5. *What did you eat when?

6. When did you eat what?

7. *Whom do you think who loved?

8. Who do you think loved whom?

9. Who do you want to go shopping when?

10. *When do you want who to go shopping ?

11. *What do you think he bought when ?

12. When do you think he bought what?

参考文献

外国語文献

Angelovska, Anjero and Angela, Hahn（2017）L3 Syntactic Transfer Models, new developments and implications. John Benjamin Publishing Company.

Anderson, Stephen R and Kiparsky, Paul（eds.）（1973）A Festschrift for Morris Halle. Holt, Rinehart & Winston. pp. 232-286.

Akbulut, Fatma Demiray（2020）The effect of first and second language on the third language: An observational study. International Journal of Social Sciences and Education Research, Vol. 6, No.3.

Bailyn, John Frederick（2012）The syntax of Russian. Cambridge University press.

Bardel, Camilla and Sánchez, Laura（eds.）（2020）Third language acquisition; Age, proficiency and multilingualism. Language Science Press.

Blay-Vroman（2002）Frequency in production, comprehension, and acquisition. Studies in Second language Acquisition, Vol. 24. pp. 209-213.

Bošković, Željko（1995）Principles of economy in nonfinite complementation. Ph.D. dissertation. University of Connecticut.

Bošković, Željko（1997）Superiority effects with multiple wh-fronting in Serbo-Croatian. Lingua, Vol. 102. pp. 1-20.

Boškosvić, Željko（2002）On multiple wh-fronting. Linguistic inquiry, Vol. 3. No. 3. pp. 351-383.

Boškosvić, Željko, Franks, Steven and Snyder, William（eds.）（1998）Formal Approaches to Slavic Linguistics, Vol. 5: The Connecticut Meeting. Michigan Slavic Publications.

Cabrelli Amaro, Jennifer, Flynn, Suzane and Rothman, Jason（eds.）（2012）Third language acquisition in adulthood. John Benjamin Publishing Company.

Chomsky, Noam （1973） Conditions on Transformations. In Anderson, Stephen R and Kiparsky, Paul（eds.）A Festschrift for Morris Halle. Holt, Rinehart & Winston. pp. 232-286.

Chomsky, Noam（1977）On Wh-Movement. In Culicover, Peter W, Wasow, Thomas and Akmajian, Adrian （eds.）Formal Syntax. Academic Press. pp. 71-132.

Chomsky, Noam（1993）A minimalist Program for linguistic theory. In Ken, Hale and Samuel, Jay Keyser (eds.) The view from Building 20. MIT Press.

Citko, Barbara (1998) On multiple WH movement in Slavic. In Boškosvić, Željko, Franks, Steven and Snyder, William（eds.）Formal Approaches to Slavic Linguistics, Vol. 5: The Connecticut Meeting. Michigan Slavic Publications. pp. 97-114.

Culicover, Peter, Wasow, Thomas and Akmajian, Adrian （eds.）（1977）Formal Syntax. Academic Press.

Dehghani, Najmeh（2024）A Meta-analysis on the Acquisition of Morphosyntactic Language Transfer Models in Third Language Acquisition. Ph.D. dissertation. Idaho State University.

Flynn, Suzanne, Foley, Claire and Vinnitskaya, Inna（2004）The cumulative-enhancement model for language acquisition: Comparing adults' and children's patterns of development in first, second and third language acquisition of relative clauses. International Journal of Multilingualism, Vol 1. pp. 3-16.

García Mayo, María del Pilar and Rothman, Jason（eds.）（2012）L3 morphosyntax in the generative tradition The initial stages and beyond. John Benjamins Publishing Company.

Haegemann, Liliane（ed.）（1997）The New Comparative Syntax. Longman.

Håkansson, Gisela, Pienemann, Manfred and Sayehli, Susan（2002）Transfer and typological

proximity in the context of second language processing. Second Language Research, Vol. 18. No.3. pp. 250-273.

Ken, Hale and Samuel, Jay Keyser (eds.) (1993) The view from Building 20. MIT Press.

Lasnik, Howard and Saito, Mamoru（1992）Move-α Conditions on Its Application and Output. MIT Press.

Leung, Yan-kit Ingrid (2005) L2 vs. L3 initial state: A comparative study of the acquisition of French DPs by Vietnamese monolinguals and Cantonese-English bilinguals. Bilingualism: Language and Cognition, Vol. 8. No.1. pp. 39-61.

Leung, Yan-kit Ingrid（2009）Third Language Acquisition and Universal Grammer. Multilingual Matters.

Maharaja, Anoop Kumar （1990） The A/A-bar Distinction and Movement Theory. Unpublished Ph.D. dissertation. Massachusetts Institute of Technology.

Murphy, Shirin（2003）Second Language Transfer During Third Language Acquisition. Studies in Applied Linguistics and TESOL, Vol 3. No. 1. pp. 1-21.

Ostapenko, Olesya（2008）The Acquisition of multiple Wh-questions in Russian as a foreign language. Ph.D. dissertation. University of Wisconsin-Milwaukee.

Rizzi, Luigi（1997）The Fine Structure of the Left Periphery. In Haegemann, Liliane（ed.）The New Comparative Syntax. Longman. pp. 281-337.

Rojina, Nina（2011）The syntactic structures of Russian wh-questions. Ph.D. dissertation. University of Geneva.

Rudin, Catherine（1988）On multiple questions and multiple wh fronting. Natural Language and Linguistic Theory, Vol. 6. pp. 445-501.

Rothman, Jason（2010）On the typological economy of syntactic transfer: Word order and relative clause high/low attachment preference in L3 Brazilian Portuguese. In

International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, Vol. 48. pp. 245-273.

Rothman, Jason（2011）L3 Syntactic transfer selectivity and typological determinacy: The typological primacy model. Second Language Research, Vol. 27. No. 1. pp. 107-127.

Rothman, Jason（2013）Cognitive economy, non-redundancy and typological primacy in L3 acquisition: Evidence from initial stages of L3 Romance. In Sergio, Baauw, Frank Drijikoningen, Luisa, Meroni and Manuela, Pinto（eds.）Romance Language and Linguistic Theory. John Benjamin Company.

Rothman, Jason, Alonso, Jorge Gonzáles and Puig-Mayenco, Eloi（2019）Third language acquisition and linguistics transfer, Vol. 163. Cambridge University Press.

Rothman, Jason and Cabrelli Amaro, Jennifer（2010）What variables condition syntactic transfer? A look at the L3 initial state. Second Language Research, Vol. 26. No. 2. pp. 189-218.

Saito, Mamoru (2003) A derivational approach to the interpretation of scrambling chains. Lingua, Vol. 113. pp. 482-518.

Scott, Tanya（2002）CP-Topic Parameter and Russian Wh. Paper presented at the 79th Annual Meeting of The Linguistic Society of America. GA.

Sergio, Baauw, Frank Drijikoningen, Luisa, Meroni and Manuela, Pinto（eds.）（2013）Romance Language and Linguistic Theory. John Benjamin Company.

Slabakova, Roumyana（2012）L3/Ln acquisition. In Cabrelli Amaro, Jennifer, Suzanne Flynn and Jason Rothman （eds.）Third language acquisition in adulthood. John Benjamin Publishing Company.

Slabakova, Roumyana and García Mayo, Maria del Pilar（2017）Testing the current models of third language acquisition. In Angelovska, Tanja and Hahn, Angela（eds.）L3

Syntactic Transfer: Models, New developments, and Implications. John Benjamins Publishing Company. pp. 63-84.

Stepanov, Arthur （ 1998 ） On Wh-Fronting in Russian. Proceedings of the North East Linguistic Society, Vol. 28. pp. 453-467.

Stjepanović, Sandra（1995） Short-distance movement of wh-pharases in Serbo-Croatian matrix clauses. Paper presented at the Comparative Slavic Morphosyntax Workshop, Spencer, Ind.

Takahashi, Daiko（1993） Movement of WH-Phrases in Japanese. Natural language & Linguistic Theory, Vol. 11. No. 4. pp. 655-678.

Watanabe, Akira（1993） AGR-based Case theory and its interaction with the A'-system. Ph.D. dissertation. Massachusetts Institute of Technology.

日本語文献

石岡精三（2001）Superiority Effect について（Categorical Checking versus Featural checking）. 長岡技術大学 言語・人文科学論集第 15 号.

金ヘイン（2022）第三言語習得研究の現状と課題-L3 としての日本語教育研究への示唆の観点から. 一橋大学国際教育交流センター紀要第 4 号. 71 頁-81 頁.

佐野富士子（2023）第二言語習得研究の発達の概観と現代的課題-EFL 学習者の英語力育成を目指す教室での第二言語習得. JACET 関東支部紀要第 10 号. 5 頁-26 頁.